

斯かる始末は何時か一藩の噂となつて、岩見の臆病者と評判が立つた。毎年八月十五日は箱崎八幡の例祭で、家中の若待も参詣する者多く中々の賑ひ、重太郎は伯父の許しを得て若黨一人を供に参詣に来た。これより先に野村金八郎、成瀬権十郎、日野六之丞など云ふ血氣の壯者八人連、當日境内に催しのある野試合に臨まんと参詣を終り、今や幕張の内に入らんとする時、重太郎の來たるを認め、
「各方、あれ見られよ、岩見の臆病者が参つた、今日の好慰みもの、幕張へ引張込うではござらぬか。」と金八郎は發言した、前後の思慮なき壯者ども、夫れ面白からんと同意した。
八人は重太郎の歸りを鳥居前にて待受け、
「岩見氏暫く、貴殿の下向を先刻よりお待申しした。……今日は御承知の如く奉納試合がござるので、我々も出掛て参つたが、貴殿の御尊父と云ひ伯父公の源田氏と云ひ、立派な武邊者！。貴殿とて

御心得のないとは云さぬ。今日は幸ひのこと一試合御所望申す。」と口々に言ひ、無理無體に重太郎を幕張内へ引張りこみ、果は木劍とつて目前へ突つける。斯くても未熟者を楯に辭退をするを頭に承つて、金八郎と權十郎が左右より理不盡に重太郎の肩を打つた。
「無禮者！」と叫ぶや、金八郎の打込む手先を掴んで引き廻し三間ばかり控と投げ附た。續いて掛る權十郎は空を打せて身を翻し首筋掴んで突き倒したに、一同面を見合して驚いたが、今更逃ることも出来ない、六人一所に打て掛るを掻い潜りつゝ、右に左に投げ飛ばした。意外の不意打に金八郎も權十郎も膽を寒からしめたが、此の儘に逃出されもしないので、夫れと總掛りになつて八人八方より斬込んで來た、重太郎は少しも騒がず忽ちの間に八人を投げ附け蹴倒し悠々と袴の塵を拂つて立去つたには、八幡宮の祭禮に参詣の群集が舌を巻き、其の評判はバツト家中も町も一杯に廣まつた。

臆病者よ白痴者よと輕蔑した重太郎の振舞に一家中は驚き。殊に父や伯父は其の非凡の腕前に驚嘆して、初めは眞實と信じなかつた程、けれども木劍把て試ると中々に父も伯父も遠く及ばぬ鍛練、左右から修業の次第を尋ねられ今は包むに難く實を告げ、扱はくと二度吃驚した。然るに入幡宮にての手練は大守に聞えて召出され、岩見一家は面目を施すにつけ、彼の野村廣瀬の面々は不覺を取つた。鬱憤止みがたく、彼等に組する偏執の壯者二十餘名密議を凝し、計略にて此の遺恨を晴さんと、一日大谷三平といふ者仲裁者と稱し、彼の八人と和睦の宴を開かんと重太郎を酒亭を伴ひ出した。三平は仲裁役である。周旋最も力め、

「岩見氏、さア何うか此方へ御着席下されい、其處では亭主役が困る……。」

と金八郎等も表面は打解けて、頻りに入幡宮に於ける無禮を詫ひ、且つ大守へ御目見得した恐悅を述べ、阿諛を専らとして二十餘人が交るゝ盃を勸める、重太郎は返盃ゝまた返盃に思はず酒を過して席に堪かね、隣室に入り倒れると其の儘の高舁、野心を抱く壯者等は仕澄したりと喜び、皆こそゝと酒亭を引き揚げ、何處ともなく立ち去つた。

重太郎は目を覺すと既に一人も居らぬ、亭主を呼びて聞けば皆歸つたと云ふ、時は早や子刻遅くなつたと提灯を借りて酒亭を出で二更も過た、市街は寂寥として往來も絶た、別て市中を離れた柳澤堤、川添柳は兩岸に密生して小闇く、中を流るゝ谷川は水勢滔々をの音の凄く、何となく好心地のせぬ陰鬱な處である。重太郎は醉歩踏躑片手に提灯をさげ、ふらりと柳澤堤に掛り、夜風に醉顔を吹がせ堤防の中央なる七本柳とて七株の柳の大樹茂るあたりへ來た、

この邊は殊に小柳も密生する、大樹の枝葉は己が儘に蔓つて盡も間
い處だ、況て夜は星の光も見えぬ眞の闇黒、馴れた道とて苦にもな
らず、踏々踏々しつゝ來かゝる左右より物をも言はずバツサリと斬り
附けた、大抵な者なら此時血煙立て仆れるのだが、如何に酷酷して
居ればとて刃の風に油断なく、二三歩退りて身構へると、前よりも
後よりも白刃は暗に閃めいた。重太郎心得たりと一刀の柄に手が掛
るや、忽ち二三人斬り捨て、闇黒を探りて寄り來るを觸るゝが儘に
斬りつけ薙立てる飛鳥の働きに十七八人も斬つたる如く、尙ほ油断
せず柳の大樹を楯に取つて構へたが、窺ふ者もない體なれば少しく
氣が弛むと渴を覺え、茂る柳を押分て溪流に、嗽ぎ一息つくうち、東
の方からポツと白み渡つた。
夜明て見ると覆面かけた狼籍者は皆家中の壯者である、而も酒亭
へ我れを招き和睦の宴を張た、野村金八郎成瀬權十郎等一味徒黨の

面々であるに、重太郎再び驚きたるも最う是非がない、直ぐ重役に
届け出て段々取調になると、重太郎一人を相手に徒黨を組みたるは
言語同断の振舞、殊に大半討果されしは不覺の至りである、重太郎
は差構へなしと言渡された。

然れど多くの人を憫めたこと、岩見家に於いては家中の人々に遠
慮もあるので、重太郎は諸國修行に出た。世間體だけの親子勘當！。

三 臨機應變の太刀

柳桃雨を帯びて臘脂濡ひ、楊柳風に當て綠綺低き朝も、一聲の老
鶴を月中に聴き、萬里の秋游天外より來るの夕も、所定めぬ旅から
旅の武者修行、昨日は彼處今日は此處、飄然として去り忽然として
來たる岩見重太郎、筑前名島を出てから京大阪を足溜り、大和巡り
などして東海道を下り江戸に着た。

當時豊太閤は既に世を去り、徳川の威望日に高く慶長八年家康に將軍の宣下あつた頃、まだ江戸の城も成らず混沌たるものであつた。其の勢ひを見て風雲に乗せんとする浪士の江戸へ入込むもの多くある。重太郎は此の發展せんとする江戸の光景を見物しつゝ、一日板橋の宿外れまで歩を延し、或る腰掛茶屋に休憩してゐる。こゝに集る種々の人の口から出る噂に、高野彌兵衛と云ふ劍士があつた、それが稀世の豪傑である、三十餘人の若侍が暴行を挫いたと言囃すのが耳に入つた。重太郎は腰掛を離れて其の人々の前に進んだ。

「卒爾ながら只今承れば、御當所に高野先生と仰せられる豪傑が在るとの話、某は武者修行を致すものでござるが、御宿所は何れでござるな。」

「高野先生かな。これから一丁許行かつしやると、大な看板が出てゐるぢや、盲目でも直ぐ分りませう。」と教へてくれた。重太郎は

一禮を述べて茶屋を出て、一丁許行くと立派な株木門の家がある、劍術兵法柔術指南と云ふ大看板が掲げてあつた、扱は此處だなど首肯て玄關に掛つた。稽古着に袴をはいた門弟らしき若侍が取次に出る。

「某は回國の武者修行でござるが先生の御高名を承り推参いたしました、何卒一本の御教授に預りたい、宜しく取次を願ひます。」と丁寧に申込んだ。

身體骨格こそ偉大なれど、まだ弱年の模様を一見して、彌兵衛は心中に侮り

「お見掛申した處も年も若いに諸國修行御殊勝のお心掛に存じ申す何流を學び居らるゝぞ。」と言葉は丁寧であるが傲驕の態度が現れてゐる、重太郎も癪に障つたから一番搦揄てやらうと莞爾して

「某は諸國を修業を致すもの、諸流の先生と立合その長所を取つて

自分の短所を補ひ居りまするので、殆ど極つた流儀はござりませぬ、隨機應變の太刀を使ふのが某の流儀、只々見苦しい敗を取らぬやう心掛けて居るまでで……。」と答へた。彌兵衛はその高慢の答へに怒りを含み、此の青二歳何程の事かあらん、只だ一本に叩き伏せて懲しくれんと、門弟二三人に試合をさせて見たが宛て赤ん坊のやうに扱れる、彌兵衛は案に相違して道は容易ならぬ奴と、自ら木劍を構へて見たが何うして敵すべき、更に打込て往く隙がないに汗を出し息がはずび、一聲氣合が掛つたと思ふと彌兵衛は忽ち尻餅ついて仆れた。

「これは失禮を致した……。」と重太郎は會釋して彌兵衛を引き起した。門人どもは餘り呆氣なき師匠の負けに氣を呑れ、介抱もしないで驚いて居る。彌兵衛は腰の痛さを忍び顔を怒めつゝ、

「御挨拶恐れ入ります。貴殿の御修練には驚き入つてござる。何卒

當道場に暫くなりとも御逗留下されて、我々へ御教導に預りたし。と無理に引き止めた。

元來彌兵衛は奸佞賄智に長た奴、我が業の重太郎に及ばざるを遺恨に含み、言葉を卑ふして其の歡心を買ひ、機會を見て打て捨んの覺悟であつた。けれども尋常の事では到底目的を果せない、晝夜重太郎の舉動に注目して居る。

此のころ板橋の花と囃れ妓樓三浦屋に若村と云ふ遊女があつて、標致は素より立居振舞、群をぬき、全盛を極めて居るが、如何なる客でも枕を交す者なく、座敷勤めのみにて打解けぬは大望のある身と察した彌兵衛は、密に危暴者三十餘名に金嚮を符め、三浦屋の二階にて暴行させ、機會を圖つて飛込みさま片つ端より懲して退け、其の武術の秀し如く装ひて若村を懐んとした。其の計略は圖に中つて目前に見聞した若村は彌兵衛に馴れ親んだ。然れど猶ほ枕は交さ

ぬ。花の枝は手に握つても折るに折られぬを焦慮つゝ、毎夜三浦屋へ通つてゐる時である。

引き止られる儘五日六日と逗留する重太郎の耳にも此の噂は入つた。彌兵衛と立合たときから、如何に酔漢であつたにしても三十餘人を挫いだとの評判に疑ひを抱き、之れには何か譯のある事と察し居る折柄、門弟等の噂に彌兵衛の胸中を覺り、其の我れに對する素振を考へると、赤心を以て迎へるとも思はれぬ節がある、斯かる處にうかく長居するは無用、詰らぬ事に争ひを生ずるも無益の至りだと思つて、今朝は道場を立去らんと身支度する時、

「岩見先生に折り入つて願ひの儀がござりまするが……。」と恐るゝ襖を開けて入つて來たは、彌兵衛の高弟と呼ばれ代積古をする江原惣平である。

「あゝ、江原氏でござるか、御遠慮なく此方へも通り下さる。」

「はい、有難うございます、御免！。實は少々拙者の口よりは申し伺い事でござるが、岩見先生にも薄々は御承知で……當家主人の儀に就て是非とも御意見を願ひ度でございます。昨今の有様では道場の信用も次第に覺束なく相成ますこと、假令相手が遊女なりとも性質さへ宜くは當家へ引取りても苦しふあるまいと、我々門弟中が協議致しました、師匠に向つて我々より斯様な儀を申し入るは何となく遠慮いたされませう。何うか先生の心附にして此の儀何とかお取計ひを願はしふ存じまするが如何なもの……。」

「某とても迷惑な頼みてござるが、折角江原氏の御依頼……某より高野氏へお勧め致すにも全然その婦人を知らぬも異なもの、一應婦人の胸中も確かた上て御相談いたさう。」
婦人などは見向きもせぬ重太郎、苟且にも遊女でありながら酒宴

の席より客に接せぬとは奇物である、勘者である、何様女かと云ふ好奇心に駆られ、惣平の頼みを承諾した。

四 兄妹袂を絞る

「あゝ、兄さん……。」と突然重太郎の膝に縋り附て泣き伏す遊女若村を突き退け、

「岩見重太郎は斯かる妹は持たぬ！」と席を蹴立て去らんとする袴の裾確かと捉へ、

「其のお腹立は御道理でございますが、兄さん！あなたはお國表の大變御承知の上のお言葉でございますか……。」と重太郎を見仰る眼よりは涙がほろ／＼と溢れる。

「なに、國表の大變！」

「御承知ないのでございまするか、先づお座んなして下さい、耻し

い此様形てお目に懸つたも忘れ、只だ嬉しさが先立ち淺慮い只今の振舞、御腹立もございませうが何うか御勘辨を……。」

「左様な詭言は何うでも好い、國表の大變とは氣に掛る、御両親に何事か在了したかの、又兄上は如何がなされたな。泣いてばかり居ては様子が分らん！」と重太郎は膝を擦寄せた。

「はい、私が此様耻しい形になりましたも夫れが爲めて……。」と若村はまた袖を咬へて泣く音を忍ぶ。

「いよく氣遣しい、仔細を語れ！」

「はい、父上は一昨年の霜月、殿様の御前にて若殿秀秋様の御師範役大川八右衛門と軍學とやらの御問答を遊し、八右衛門が一言の御挨拶も出来なかつたを恨み、成瀬萬太夫廣瀬郷左衛門と共に退城を馬場先の一ツ橋にて卑怯にも鐵砲にて狙撃いたし、其の上三人して斬附け、無念の最期をお遂遊しました。」

「何と申す、父上には大川等の爲めに横死遊した……。」と無念骨髄に徹した重太郎は身を顛して悔み歎き、國遠してより消息もせぬ不孝から、父上の御最期も知らずして過したる不甲斐なさ、あゝ残念な事をしたよと愁然として愛ひに沈む。

「兄さん、まだ夫のみでない。」

「然らば母上は何う遊された！兄上は如何なされた！」

「はい、其の母様……。」と又潜々と泣き、流なす涙に咽びて言葉も出ないを、重太郎は聲を勵まし、

「こちらに、妾は賤き遊女に扮すとも心は我が妹と思ひしに、性根まで腐つたか？」若村の態度は忽ち變つた！涙に曇る眼は涼しく睨つた！

「兄さん、憚りながら、妾は遊女の若村でも心は岩見辻でございませう。はい、大望を抱いて……。」と言ひ掛けるを。

「これ、壁に耳あり、放心した事は口走るまいぞ！」と兄は制止した。若村も我れ知らず袖もて口を抑へた。

「母上は如何なされたぞ！夫れ聞う。」

「はい。母様は敵の行方知れぬを苦になされ、病の爲め衰しや是れもあ亡れなされました。大兄さんも是非兄さんにお目に掛り共々にと仰やりました、お上へお願ひ申し兄妹二人で何處を當ともなく故郷を出ましたのは去年の正月二十四日でございませう。」

「ふむ、兄上は其許を伴て……。さうして兄上は如何なされて居る！、何處に渡らせらるゝぞ！」

「さア、其の大兄様が御存生ならば私も此様勤めにまで身は落しませぬが、頼りにする大兄様は……。」

「お果なされたと申すか。」

「はい。而も去年の秋は半でございませう、桐生尼利の方に心當りの

ありましたので、一月餘り尋ねて見ましたが更に手掛りがありま
せん、此の上は一度江戸表をと存じて此の宿手前の暇へ掛りまし
た。その時は日も全く暮れ果て、一方は廣い野原一方は川原の寂
しい往来、背月をせめての便りと案内知らぬ道を参りますると、
擦れ違ふた五六人連の侍の内、敵大川八右衛門、成瀬萬太夫、廣
瀬郷左衛門の三人が居りますから、大兄様は名乗掛て斬り附けら
れました、私も女ながら一生懸命に斬つて掛りたう思ひましたが
常々大兄様から奮闘最中に出ではならん、足手纏になつて働けぬ
との仰りや、附を守り片陰に隠れて居りましたが、情なや大兄様は
衆寡敵せず、既に危く見えましたので夢中で飛出し大川目掛て斬
り附けるを、一刀に拂はれ此の身は斬られたと覺悟の處へ、深編
笠の武士一人、敵の奴等を薙ぎ仆し蹴仆しなされる勇氣に恐れ、
大川等は逃散りましたが、大兄様は其の場にバツタリ仆れて蟲の

息で……。」

「はて残念至極なことを致したな、兄上は夫れ切りであつたか？」
「え、深編笠の武士は塙圍右衛門と仰やる浪士で、御深切にお
世話下され、私より事の次第を申し上げますと、大層残念に思召
し、此の上は大兄様の療治を専一にしなければならぬと、當宿の
俠客若松屋太兵衛と申す者に兄妹をお預け下され、種々御介抱申
しました、大兄様は急所の重傷にて到頭御療治も届かず、終に
恨みを呑んで果敢なくお成りなされました。」
「それで其方は勤め奉公を致したと申すのか。」
「はい。私は女の悲しさ、假令敵に再び同會ても返討は知れてある
こと、一つには何うか後楯となるべき人を求め、怨み重なる三人
を討たい所存、又一つには此様勤めをするときは多くの人に出會
こと、若し兄さんの御行方が知れ、御兩親様や大兄様の敵が討や

うかと甲斐なきことを空頼みに……。」

「事情は能く解つた！。然らば高野彌兵衛に頼る氣であつたらうな。」
と言れてハツと驚いたが、屹度容儀を正し

「お察しの通り、初めは左様にも思ひましたれど、酒席で馴染につ
けて頼むに足りぬ男と氣附ましたので……。」

「身は汚さぬと申すか。」

「はい。斯様の姿では居りますが、其の御心配だけは……當家の主
人にお聞き下しても、若松屋太兵衛へお聞き下しても……。」

「可し！可し！。斯く邂逅うへは兄妹一致して御両親や兄上の妄執
をお晴し申すが孝道である。それに就ても其方の身の代とやらは
何程であるな。」

「私の身の代などは更に御心配は入りませぬ、今は自由の我儘勤め
只今からでもお供は出来まする。」

「左様か。……兎に角、主人と太兵衛とやらに……。」

「はい、直ぐ呼びに遣しませう。」

五 遺恨愈深し

野も山も生々として緑翠滴る中を、若き男女の二人連れ、餘所目
には羨まれても、互の胸と胸とに疊む思ひの憂き旅を、幾日かさね
ても晴るゝ時節の何時来るか、草のそよぎ木の殖立ち油断なく、心
を配る臥薪膽嘗の苦を忍び、俱不載天の饑、假令天に翔り地に潜る
とて、兄妹の一念などか見逃すべきやと、岩見重太郎は妹お辻を伴
ふて、奥州筋へと志しつゝ、仙臺領の境へ來た。

六十餘州を掌握して嫌らず朝鮮へまで軍兵を繰出し、勢ひ旺盛な
りし豊臣の天下も、秀吉死して諸侯は關闕し、加ふるに秀頼の關愚
克く下を懐るに難く、天下は徳川に移つて關東大坂の間和熟せず、

機會あれば打て出で漁父の利を搦んと日和見の大小名、此處彼處に弓を張り槍を伏せて窺ふ時である。奥羽の要地を握つて徳川の味方に附くとも、油断のならぬ時世、何う云ふ間者の入込みて領内を攪亂し、機に乗じて伊達政宗の驍を引かんとする黠鼠のなきも圖られずと、領内十餘所に關所を設けて旅人の往來を警戒し、用心最も嚴重なるは仙臺領であつた。殊に國境の關所は一層注意を拂ひ、少しにても怪しき者と認めると、武士とて町人として更に容爾なく引括りて調べる、別て浪人者と見るときは其の舉動に深く眼を配つて居た。仙臺領は警戒が嚴しいとは薄々聞ても居たが、左程まではあるまいと一點身に疚しき處のない重太郎、妹を伴ふて關門に掛り「某は筑前名島の浪人岩見重太郎と申すもの、召連れ申すは妹辻一御城下へ用向のあつて参るものでござる、何卒當御關所をお通し下されよ。」と丁寧に言た。

然るに浪人と云ば目を丸くして注意する關所の役人、俄に狼狽して目顔で指揮した。六七人の捕吏は得物を携へてバラ／＼と兄妹を取巻た。重太郎は驚いて聲を掛け、「あいや方々、何故あつて我等兄妹を、斯く仰々しくなさる。」と乗出して詰問するを、役人は冷笑ひ威猛高になつて、「其方は岩見重太郎妹辻と名乗るは偽りであらう。」
「全く以て姓名を偽る某にはあらず。お疑ひを被つた仔細お明し下されたい、立處に申し披き仕らん。」と憤怒の狀を現して詰寄つた其の舉動に偽りありとも見えぬが、此の儘放ち遣ふことは出来ぬ。若しも手落となつては腹搔切つて果ねばならぬ次第、關守は面を柔げ
「お手前の舉動では全くの御兄妹と察し申すが、當方に訴へある罪人と服装年齢の酷似たる處あり、一應の取調を終るまでは、當所

を無事にお通し申す譯には相成申さぬぢや、取糺し相濟むまで拙者役宅にお止り下されうや、夫れとも強て御通行とあらば是非に及ばぬ役目の手前……。」
「は、ア承知致した、事を分れるお取扱ひ謹んでお言葉に従ふでござらう。」と重太郎も争つて關所を破るは譯のない事であるが、妹を連た身ては夫れが爲に思はぬ難儀がお辻に罹るも知れぬ、況て兄妹の身の上に何等の懸念もなき一時の嫌疑、假令暇取るとも騒ぎを起すは本意でない、妹を慰めつゝ關守の役宅へ引かれた。
關守は遠山左源太と云て温厚で思慮の深き侍である。彼れが兄妹を此の儘通しては役目の落度と叫んだは、隣國南部侯の領内に於て郷士の許に寄食した浪士が、郷士の娘と不義をなし娘の父を殺して共々立退きしを、村役人どもより此の關所へも通知し、領主伊達家からも隣國の好み取て押へよとの嚴命の下つて居たからである。然

れど岩見兄妹は左様なもので無い事も分つた、殊に大望ある者と知れたので、左源太は暫しでも思しき疑ひで足を止させたを氣の毒と頻りに重太郎に謝しお辻を慰めた。
あゝ儘ならぬは浮世、お辻は父母に別れ兄を力に纖弱き女の身もて大志を抱き、浮草の風のままに、處定めず漂泊するうちに、偶々敵に逢ながら兄重藏は哀れ返討、寄進なき身にも心雄々しく初一念を貫かんと苦海に沈みし甲斐あつて、重太郎に邂逅、あゝ嬉しやと心の弛みし處を今度の嫌疑、千々に胸を痛めたが原因となり、重き枕に着た。旅寢の空で病氣ほど心細きは無きに、尙ほ其の身に抱く大望の手掛りすら無く、彼れを思ひ之れを考へてはいと氣も結ばれ、日に細り行く姿を介抱する兄重太郎も流石に妹の胸を察しては暗涙に咽んだ。情ある左源太は克く面倒を見てくれた。けれど不運なお辻は長い恨みを有つて、瞑目すべからざる目を永久に眠つ

た。

浮世は人の假枕生あるものは死するが慣ひとは云へ、若葉の茂る中に橙の古葉と世を捨て往く、妹の不運を救いても今更に還らぬ諄言、重太郎は土饅頭に別れを告て旅立ち、此の上は一日も早く敵大川八右衛門成瀬萬太夫廣瀬郷左衛門を尋ね當て、両親を始め兄や妹が修羅の迷ひを晴すが我が急務である。思ふ儘なる勝手な旅に過すは不孝！、それに附ても雲を捉へ風を追ふに均しき三人の行方、何を當に尋ねんか、恨みを吞んで宇宙に彷徨ふ親兄妹の靈が導くに任んと決心し、何となく石の巻の方へと赴いた。

石の巻は左に萩の濱を控え、右に鹽竈仙臺を抱く繁昌の港である入船出船も晝夜賑ふ雑間の土地である。萬が一にも敵の行方を探る手掛もやと注意をしたが齋餅に屬した。聞く盛岡は文治の昔より南部家の城廓あつて繁華の地、武藝もまた盛んなる處と云へば大川等

の竊に潜伏するも知れず、足を盛岡に伸さんと重太郎は尙も北進した。駐ること數日何の手懸も得ない。只だ厨川の西北岩手山の麓に近頃三人の浪士があつて劍道を教へ評判好しとの噂がある。三人の浪士とは氣に掛る言葉だ、若しや彼等にてはあるまいか、いざや探り見んその三人！。

六 岩手山中の怪獸

岩手山は岩鷲山とも云ひ又霧山嶽とも呼び、或ひは奥の富士とも稱して古來歴史に名ある高山である。所々深林翁鬱として晝も小暗く、怪禽奇獸時に姿を現して人を驚かす窟間もある。其の麓に道場を設ける三浪士とは何者である？。若しや世を狭めらるゝ大川等にあらざるかとの疑心を晴すため、覺束なくも辿り着た。

山麓の村は僅に數十戸の寒村、道場などの跡もなく浪人者の住み

さうな處もないに、扱は怪し、奇を好む人の噂のみかと、或農家に
懇ひて聞合せば、草鞋を造くる朴訥な老翁は、
「はあ、三人組の侍かな、夫りやも前様この山の山腹にある辻堂に
轉つて居るんぢや、此の五七日は姿も見せねえが、何でも大守様
の山狩さつしやるを待てるとの評判でう……。」
「は、あ、此の岩手山に居るのか。」と重太郎は道を尋ねて登山した。
峻阪峻岨の難路では無いが、奥の富士と呼ばれるだけあつて奥深く
分け入るほど、山氣肌膚を刺して悚然とする、殊に大樹蔭と繁る
深林に入ると晝も暗く物凄しい。進むに従つて道は次第に細く、夏の
中とて樹々は枝葉重りあふて天日を掩ふてゐる、一際凄く老杉古檜
の群立中に、屋根は傾き椽は朽た辻堂一字を見出した、是れなり！
是れなるべしと重太郎は立寄つて内を窺へば、食器鍋釜の類散亂し
如何にもまだ人の住する趣きがある。いざ待ん、彼等の歸り來るを

假令果して尋ねる敵にあらずとも……。重太郎は辻堂の濡椽に腰を
掛けたは最早夕暮！。腰にした握飯を嚙り谷水に咽喉を濕すと、う
とくと睡氣のさす儘に脛を枕、ころりと成れば舂聲雷のごとく響
いて夢に入つた。
巖を穿つ露の流れは袈に響いて凄く、深山の夜氣襲ひ來つて寒さ
を覺えた重太郎、あゝ思はず一睡したと呟きつゝ、辻堂の内を見れ
ど主は歸らず、四邊は寂々寥々木の間も星の光いと凄しい。一睡と
思ひしに餘程夜は更たと見える、今にして辻堂の主の歸らぬからは
疾く蟬脱の殻ならん、あゝ徒に日を過しつるよ、今更不知案内の山
路を下るも面倒、今夜は此處でと辻堂に内に入つた。
最う夜半でもあらうと思ふ頃、忽ち一陣の怪風が起つた、堂の四
方はざわくと騒がしい物音が激しくなつた、其の風その音は何と
なく肚腸へ沁るやうに凄しい、扱は何物か味を遣り居ると重太郎は

外へ注意を拂つた。騒がしい凄い音が静になると、ドサリと何か落ちたやうな響きがある、暫くするとがさ／＼と這歩く音が聞え、堂外より窺ふものがある様子である。いよ／＼怪しい。それが破堂の假の主が歸つたものとも思はれない。山脈は遠く走りて山また山を重ね、白晝として樵夫も稀な奥の富士、如何なる怪獸の住むも知れずと油断せず、窃に身を堂側に寄せて狐格子の蔭より覗くと、寂々寥々として山氣満ちた真闇の中に、光輝こそ放たねど炯々たる二個の輝きが認められる、其の大小茶碗ほどもある。それが確に怪物の肉眼である事は明かだ。而して其の形は暗の戸張に隠れて想像がつかない。己れ怪物來れ！一刀の下に兩断して呉れんと重太郎は刀の柄に手を掛け、鯉口寛げつゝ待ち掛けて居た。

奥ひ匂ひがするぞと言ぬばかり、のそり／＼堂内へ入り込んで來た。今や狐格子に手を掛けて押明んとする、重太郎は内より支へて見たが大力者なる其の手腕にも、押明る怪物の腕力には絶大の力がある若し之れに搦れたら容易でないと舌を巻き、支へた手を引くや唐突に炯々たる眼光を心當て、發止斬り附けた。ガチリと云ふ音がして石でも斬つたかの如く、刀を跳ね飛ばして受け附けない。怪物は平氣である、尙ほのそり／＼と侵入して來る、重太郎も初太刀の失敗に憤ほりて又も鋭く斬つた。今度も其の身體へ斬り込むことは出来なかつたが、初太刀より確に手耐があつた、怪物は唸り出して重太郎へ飛鳥の如く飛び掛るその速さその凄さに驚嘆しつゝも、素より鍛練の積んだ手利き、飛び來るを身を避けながら、腹部のあたりを目掛けて拳も徹れと突いた、其の早業に流石の怪物も避けかねて、濡縁に飛び出して倒れた、再び抵抗する勇氣はないが、眼を瞋し牙を

咬み鳴らし凄い、唸り聲を發して傍へ寄せ附けない、その聲の怖しい反響が闇夜の深林に籠つて、何ともいへない悽愴の光景を描いて、萬夫不當の英雄も氣味悪く感じた。それも一時、曉明近くなつては、唸り聲も時々刻々と衰へて次第に弱つて行く、夜の明放れる頃は最う全く弱り果て了つた。怪物は何である？。身體一面巖の如く松脂にて固め、之れを斬れども之を突けども刀槍の刃も立たぬまで、針の簀を鋼鐵の皮の上に着た如く、只だ腹の一部のみが僅に毛を存する百餘年も経たる狝々であつた。

重太郎は獸怪の落命る煩悶の狀を眺めつゝあつた。突然後に聲あつて、

「岩見氏にあらずや。」と堂後より三人の修行者が現れた。

「やあ是れは……。」麓の時に聞た三人浪士とは各々方であつたか。」

「近頃仔細あつて當地へ下り、世を忍ぶ我れくの住居はこの辻堂

でござる。」と一人が微笑めば、また一人、

「今に始めぬ岩見氏の武勇には、感心いたしてござる。」

「各方の住居とも知らず昨夜は、此處に夜を明さんとした、處が御覽のこの奴に襲れ、既に餌食となるを漸う逃れ申したまででござる。」

「我々どもは多く夜分は不在勝でな、最う一月にもならうが斯様な物に逢ひ申さなんだに、偶の珍客に馳走振致したのでござらうよ、はい、はい。」

「時に岩見氏は何うして此處へ渡らせられたるな。」

「某は仔細あつて大川成瀬廣瀬と申す三浪士を尋ねる處から、各方を若しや其の三人にあらざるかと存じてな……。」と互に隔なく語り合つた。此の三浪士は石田治部少輔三成の家臣で、齋藤伴五郎、金兵衛、大見喜治左衛門と云ひ、重太郎が大阪の地に逗留中に懇意

を結びしものである。

七 天の橋立の壯烈

丹後宮津の領主中村式部大輔一氏が近頃三人組の浪士を召抱たと
の噂、齋藤等の三人より聞ては猶豫して居られぬ、重太郎は其處を
辭して宮津へ乗込み、城下なる伊勢屋才助といふ旅宿へ着き、探り
を入ると中村家へ召抱られた三人組の浪士は松崎小平太、村田仙右
衛門、津田新左衛門と云ひ、孰れも天晴優れた武士にて重く用ひら
れて居ると分つた。然れど此の三人が大川八右衛門、成瀬萬太夫、
廣瀬郷左衛門であるか否やは知れぬ、家中の評判より推する時は彼
等三人とは思はれぬ處もある、重太郎は半落膽したものゝ、其の三
人の中切て一人にても實物を見ざれば敵で無いと否定も出来ない。
何うか好機會のあれよと待ば海路の日和とやらで、今日は大守の天

の橋立御遊覽と觸れて來た。新參なれども君侯に寵を辱ふする三人、
御遊覽の供廻に一人はあらん、此の機會を措ては何時か彼等の實否
を確かめる機會のあらんやと、重太郎は雀躍して當日下向の行列を迎
へた。彼等三人は其の名を偽りつゝも、意氣揚々として一際美々し
く装つて一行中に加つて居た。重太郎は忽ち血沸き肉躍りて、我
れ知らず一刀の柄に手は掛り、既に躍り出やうとしたが、如何兄重
藏が小早川侯より與へられし復讐免許狀を有てばとて、彼等三人は
中村式部大輔の家來である、其の供先である。徒に逸る場合でない
と自ら心を制し宿へ歸つて來た。
歸宿するや直ぐ主人を招き、事情を打明け領主の奉行所へ復讐の
願書差出し方を頼んだ、伊勢屋才助町人ながら是れまた一個の使骨
重太郎の話を聞くと一身を犠牲にしてもお望みは遂させますと誓つ
た。その一諾千斤よりも重く、假令家中の憎しみ受けて伊勢屋の暖

籠外すとも、義の爲めには何惜むべきやと東奔西走最も力めた。然れど相手が新に君寵を得て時めく三人、一家中彼れに指南を受ける者多く、罪惡の尻尾未だ現れざる時とて、重太郎の願書に就て評定は區々であつたが、小早川侯の免許狀に對しても復讐を拒むは穩當でない、助太刀勝手次第といふ議に決して、漸く願書は開届けられ家中の壯者三百餘人の助太刀と評判は遠近に響き、如何に重太郎豪傑なりとて只だ一人！。三百餘人の敵を向ふへ廻してはと危まぬは無かつた。

天の橋立の白砂青松の間に青竹の矢來は結れた。慶長十七年九月二十日の正己刻、双方とも幕張の内に控へる、合圖の太鼓は三點打つた、岩見重太郎は具不載天の父母の讐なり、兄重藏妹お辻の敵！今日只今こそ打ち取つて本望を遂げ、遺骸は泉下に埋めても魂魄は尙ほ宇宙に迷ひ、綿々として盡ぬ恨みを晴し修羅の妄執を救ふ時節

到來と、勇氣百倍ヌツト立ち出る狀の雄々しく見えた。又彼方は大川入右衛門、成瀬萬太夫、廣瀬郷左衛門の三人も、重太郎いかに鬼神の如く働くと、我れに三百の助太刀あり、返討にして枕を高く眠らんと多勢を頼みに意氣自ら昂り、是れも臆する體なくツカくと進み出た。

「やア珍しや大川成瀬廣瀬の三人とも能く承はれ！。汝等は卑怯の振舞もて筑前名島に於て我父岩見重左衛門を闇撃に爲し、まつた東國板橋宿にては兄重藏を討て捨てしよ。夫れのみならず汝等の爲には母も生命を縮められたり、妹も死したり。さア尋常に勝負いたせ！。假令何百人の助太刀あるとも重太郎が一刀の鎗と消えるまでぢや、觀念しろ！」と叫んだ。

「えい、口賢くほざき居るより念佛でも唱へ……。」と三人は傲然と太刀抜き列ねたが、素より重太郎の手腕は開傳へて知つてゐる、其

の太刀風に煽れてはとの不安心はあるので、三人三方より斬つて掛つた。

心得たりと重太郎は正面より打ち込む太刀を右に左に避けつゝ、或ひは拂ひ或ひは打ち込み、三方の太刀を物ともせず縦横無盡に斬り結ぶこと十餘合、先づ廣瀬郷左衛門の太刀は亂れた、續いて成瀬萬太夫は受太刀に成つた、之れを見た大川八右衛門は迎も尋常では敵し能はぬと察し、合圖をするや、豫て控へてゐた家中の面々四十餘人ばらくと跳り出で、口々に助太刀くと喚いてドツト斬り込んで来た、重太郎は素より覺悟のことである。假令幾百人の加勢あるとも何條萎むべき、物々しき助太刀呼はり、斯くなる上は一人も容赦はせぬの勢ひ鋭く、勇氣いよく加りて奮闘する折しもあれ、身の丈六尺有餘の大男、矢來を押し破つて跳り込み、

「岩見氏も助太刀な仕る！。拙者は巖に貴殿の御兄妹を救ひたるこ

とある、塙團右衛門直之でござる！。」と聲をかけたつゝ、携ふる鐵杖にて薙ぎ立てる其の働きの目覺しさに、助太刀の面々も思はず、さつと開いた。

「岩見氏、有藏無藏は拙者が引受け申した、お構ひなく當の敵を討つて捨て、早く本懐を達せられい！。」

「御芳志辱ふござる。心得申した。」と重太郎の勢ひはますます猛に邪魔する奴輩拂ひ除け、目指すは三人！。激しく斬り込んで来るに、三人も今は必死、鋒芒揃へて無二無三に斬つて掛るを、正面より来る成瀬萬太夫の胴を拂ひ、返す刀に廣瀬郷左衛門の肩口深く斬りつけた。手腕は冴える鞍馬八流、殊に大力無双で早業、何かは叶はん忽ち二人は血煙立つて殞れた、其の際に大川八右衛門は、えいと後より斬り下して來たを飛鳥の如く身を交しさま、大喝一聲叫ぶよと見る間に、八右衛門は眞向より斬附られて是れも搥と仆れた

犇々と仕掛るを、抗戦奮闘よく防げども勝誇る大軍の雪崩を打つて押し来たるに、如何とも爲し能はず哀れ彼れは亂軍の陣頭に立つて悪戦に悪戦をかさねつゝ身は戦場の露と消えた。只だ末代に残るは彼れが武勇の名！。

儘息絶えた。

此の瞬間三人を斬つて捨てた猛烈な勢ひに舌を巻き、其の上塙團右衛門といふ豪雄の助太刀もあるに、家中の若侍は何時か皆散亂して了つた。重太郎は團右衛門に挨拶し、敵三人の首を斬つて并べ、心に父母兄妹の靈を吊ひ慰め、團右衛門と後事を約して袂を分ち、一旦は故郷なる筑前名島へ歸つた。

暫くにして大坂に出て豊臣秀頼に仕へた、蓋し塙團右衛門の推舉に因つてであらう。慶長十九年に至り大坂と關東の和は破れ、彼の大坂陣には母方の姓を冒し薄田隼人と名乗りて、數々武勇を顯し、伊賀の上野を攻め坂本平左衛門を殺して穢多城を守り、翌元和元年には大坂城に走せ參じ、群り来る關東勢を引き受けて接戦大に努めたが、彼れが命數は既に盡きて開運の時機来らず、五月六日河内路より押し寄する伊達政宗の大勢を防ぎ、伊達の猛將片倉小十郎重綱の

近藤 勇

一 活氣人を制す

勤王の志士四方に蹶起して幕府の形勢日に非なる時に中り、驍勇を以て志士の心肝を寒からしめた、一人の英傑が亂麻の如き舞臺に躍り出で、縦に活動して衆目を一身に彙集し、幕末の花と謠れたは誰ぞ。その姓を近藤と云ひその名を勇と呼んだ！

勇は初め名を勝太と稱し、昌宜は其の諱である。武藏國多摩郡石田村の人にして父を宮川久二といつて、彼れは其の第三子であつた。小供の頃より勇悍強毅、村童等は皆彼れを恐れ敬ひ、年嵩の者もその下風に立ちて鼻息を窺ひ、只管彼れの怒りに觸ざらんことを努めてゐた。石田村の勝太といへば往々大人も其大膽不敵に舌を巻き、暴れ者として手を置けば自然村内の餓鬼大將と崇められ、部下の小

供が隣村の者と喧嘩でもして引けを取るや、彼れは忽ち幾人かの黨を組み押寄せ、敵を挫きて思ふまゝに制裁を加へ何時も凱旋する、若し當分の敵の降服せぬときは飽までも奮闘し、其の家へ押掛けて暴行を逞ふするより、果は厄病神の如く恐れ嫌れてゐた。然れど悪戯を弄して恨みなきものを困むるが如きことはせぬ、部下に屬して彼れが命令を守る者に對しては、善にあれば惡にあれば自己の身を犠牲に供し、其の者の爲に難儀を引き受けるに躊躇しない稜々たる俠骨のあるは、一村擧つて彼れを稱賛して措なかつた。

頑童盛から斯くの如くであつた勇は、素より農や商や工を以て世に立つことを甘んじない、十四歳より劍術を學び毎日近藤某の道場に通つてゐた。其の十六の春であつた、一人の武者修行が來た、近藤の門弟二人まで打ち据られたを見る勇は、憤然として立ち上つて試合を望む。既に敗を取つた同門は何れも兄弟子である、技に於いて

到底勇の及ぶところ無、徒に怒に乗じて躍り出で一敗地に塗ゆるは道場の爲めにも得策でない、彼れ自身には一層憤慨を高めるまでである、互に袖を引き袴を捉へて制止したが、中々に承知しない。最う道場の真中へ飛び出してつた。

「いざ、一本も立合申さう。」と云つて竹刀を構へたが、素より業が出来てゐるので無い、身體は隙だらけである。修行者は相當の腕前あるものならんと思ひしに案に相違した。けれども向つて來られては立合ん譯にもいかん、只だ一本に抑へ附けんとして居るうち、勇は大喝して打ち込んだ、劍法に於ては更に恐るゝに足らん少年の未熟の腕、忽ち拂ひ除けるを無二無三に打ちこむ猛烈さ、その氣合をの叫び、此さに氣を呑まれ、意の如く打ち下すことが出來ない、少しく狼狽の態度となつた處を、尙ほ激しく打ちこんで、

「お胸！」と叫んで勇の聲は道場に凄い響きが籠つた。それが未だ

消えぬ間に

「参つた！」と修行者の口から残念さうに漏れた。一同みな其の意外な勇の舉動に呆れると共に、鋭き氣性の龍を呑む勢ひあるに愕然とした。

呑龍の氣はますます強くなつて先輩と雖も、勇と立合ときは其の氣性に壓せられ、不覺を取るやうになつた。況して他流試合などに出ても、何時も氣を以て敵を制し勝ざる事なきに、人皆その膽力の斗大なるに驚嘆せざるはない程である。然れど劍法に至つては左程精しいても無く、只だ一遍の氣性能く人を折るの不思議さが、彼れが唯一の特長で、人も亦た彼れを恐れ彼れを敬ふ、自然的作用の原因となつたのである。

斯かる有様であるから勇の名は早く近郷に知られた。其の十九の秋には師匠の兄の家を繼ぎ近藤の姓を冒し、技は兎も角も如何なる

劍客と争ふとも不覺を取らず、一個の奇士として歎待され、既に劍客として立てられるに至つた。

當時維新革命の芽は萌して、勤王攘夷の議論喧しく、志士と稱する浪士は四方に徘徊して幕府を敵とし、勤王の二字を呼物に天下を横行して遊説に努め、殊に京都には薩長土の浪士が入込みて、縉紳の間往來するもの漸く多くなつた。また江戸にも各地から入りこむもの多く、近くは萬延三年三月に櫻田門外で井伊大老は水戸浪士に刺されるあり、翌年四月には又も水戸浪士が高輪東禪寺に於いて英人を傷くるあり、文久二年正月には御老中安藤信睦の坂下門外に要撃さるゝあり、其の八月には薩州侯の從者が生麥にて外國人を斬り、同じ十二月には浪士が御殿山の外國公使館を焼くなどの騷擾を極めるに、攘夷論の火の手はいよいよ盛んに今や燒點に達せんとして、京都と幕府の間面白からぬ關係を生じ、人心恟々何事も手につ

かぬ有様である。斯くなつては市中の取締も附かぬは勿論で、ヤレ今こそ辻斬に逢つたと云へば、朱鞘の大小さした剽盜に出會つたと眞者になつて慄へるもある、其の不取締を機として勤王の面を被つた、無頼の浪人者が赤鯛の素ッ破抜きして町人どもを脅し、酒の飲代を占めんとするもあつて、殆ど狼籍を極めて居る。

内患外憂に迫られて施すに良策なく、日夜頭を鳩めて、原評議に募す、幕府の役人どもも是れを放縱しては置けな、緩慢の處置に在りて日を送れば、禍端障の内に起らんも知れずと、天下の豪傑を募つて警戒の任に當らしめんとし、新徴組といふを組織した。募りに應じて来るものは率ね皆無頼の浪士であつた。

此の時近藤勇は同里の人士方歳三と共に應募して新徴組に投じた。彼れは素より人に使ふの器でなく、人を使ふの器である上に、其の特性たる勇悍にして膽略ある氣は、忽ち衆を壓服して氣に叶ねば

役人の命令でも用ひざる、無頼浪士の一團も勇の一言に命を奉ずること、自己の手足を使ふに異らずと云はれて、彼れは間なく新徴組の長と仰がれた。是れよりして彼れは活動期に入つたのである、洛中洛外に於いて天下の志士に近藤勇と睨まれ、京都の取締を弛むるには先づ近藤勇を殺せと叫ばしめたのである。

二 隊長にて可なり

天下の形勢はますます急になつた。攘夷の輿論はいよ／＼激昂して来た、勤王黨と佐幕黨の軋轢は今や極點に達した。其の間に在つて折衷説を立る公武合體の議は、殆ど水炭相容られざるの傾向を來たし、攘夷の期日を五月十日と詔勅を下し賜つた。勤王黨の意氣昂りその活躍は、幕府に制止する能力を失ふに至つた。實にこれ文久三年！。

此の時に當つて時の將軍徳川家茂は詔を奉じて上洛した、衰へたれども天下を掌握する將軍家の上洛である、其の警護の壯重なる嚴肅なる武威を示して居る、時に近藤勇も彼の新徴組を率ゐて扈從し、將軍家の警衛を司どつて居た。之れ等の事よりして京都と幕府の間に隔られた垣の一重は取拂はれ、漸く融和の曙光を認めらるゝ至つたが、勤王黨の作戦計畫は打破されんとする傾きを生じたので、躍起の活動は日を逐ふて激烈になり、京都の不穩は時々刻々と迫つて来る、従來長州藩に托されて在つた宮城の門衛は俄に停止となり、勤王黨の主魁と目される、三條實美等の漸く危急に迫るより、七郷の長州落ちとなつて志士の憤慨甚だしい。

幕府は此の機に乗じて取締を嚴重にし、失墜した名譽を回復せんとして勉め、新徴組の中には随分疎暴輕佻の者あればとて江戸へ歸し、近藤勇士方歳三等の精銳なる者數十人を留めて筆叢の下に警衛の任

を全ふせしめることに成つた、而して之れを新撰組と稱し、勇はその隊長に上げられて京都守護職松平容保の手に屬せられた。此の頃の洛中には浮浪の徒四方より群集して、彼方此方に身を潜め匿れ、幕府の捕吏と見るや不意に後より斬り附け、或は喧嘩に寄せて殺害するなど、殺氣充滿して物騒千萬である、捕吏も容易に手を下す能はず、皆自衛の道を講ずるに汲々として市中取締などは思ひも寄らぬ光景になつて居るこの間に在つて新撰組は能く活躍し、勇自ら衝に當つて部下を指揮すれば、浮浪の徒も大膽不敵なる彼等の振舞に恐れを抱き、其の手に捕はれし者數十人に及び、勇の名は浪士の間に噴々として鳴り渡り、衆目勇の一身に注ぎ狙撃を受くること幾十度!

新撰組の抑壓は幾分功を奏し、浪士の跋扈跳梁は稍や聲を潜めて警戒を専らとして居る。明くれば元治元年六月の事である、或日部

下の士慌だしく歸り

「先生！一大事を探偵して來ました。」

「ふむ、一大事とは何事であるぞ、又しても浮浪人どもが拵になり企てを致すのであらう。」

「今度のは些と念入りに計畫やうにござります、今の中にお手をお下しに成らんと臍を噛むの怖があらうかと存じまするぢやて……夫れで愈々の實否を確かめるや直様御注進に參つてござりまする。」

「左様か、如何なる計畫を致し居るな。」

「先生も御承知でゐられます、彼の四條小橋に潜匿して居る古高俊太！」

「ふむ、彼奴いよく何か始め居るのか……何様計畫ぢや。」
「餘程大袈裟な企でな……恐れ多くも火を禁裏に放ち、混雜に乗

じて事を擧ぐる相談！。その手筈は禁裏の御座近きところへ放火を致す時は、主上は御車に召して何れへか行幸遊さるゝは必定である、事不意に起る火急の場合、供奉警衛とも完全しない虚に乗じて車駕を脅かし奉つり、之れを守護して天下に號令する結構でござります。

「中々味を遣り居るの、只今彼奴は隠家に居るか……。」

「御意にござります、十數人の浪士どもと手筈の協議中らしく推測されました。」

「彼奴が計畫に就ての聯絡は餘程ついて居る様子か……。」

「左様にござります。集つて居ります浪士の顔觸から察しましても可なり聯絡は附て居やうと存じられます。」

「可し、今夜の中に召捕つて了へ！」と直ぐ手配をして、夜に入るを待ち、二人三人宛四條小橋の近傍に潜み、古高俊太の大酔して睡

りたる油断を窺ひ、咄嗟の間に十餘人の壯丁を闖入させ、俊太を楯中に押へ抵抗する間隙も與へずして召捕つた。

打てば響きの生ずるもの、俊太と志を同ふする浪士にて、四條小橋の附近に隠匿するもの多く、主謀者が不意の襲撃に逢ふて擒になつたと知るや、其の黨與數十人四方より集り來り、三條の街路に伏して勇等の引揚げを待ち、俊太を取戻さんと白刃を列ねて跳り出で要撃した、劍の光は星影に閃めいて電の如く、突貫の聲は乾坤を破つて震動するかと怪しまれ、其の激烈なること颯風のごとく迅雷のごとく、

「汝近藤勇、幕府の威を籍り我々志士を困しむる國家の大不忠者、

今夜只今天誅を加ふ、覺悟せよ。」と怒鳴る者もあれば

「古高氏を返せ、戻せ！」と叫ぶものもあつて混然雜然、忽ち斬り込んで來る、勇は泰然自若として少しも騒がず、部下を指揮しつゝ、

「汝等ごときひよろしく浪人が何百人來るとも、近藤勇は斬れるもので無いわ。……此處に待伏したる汝等こそ飛んで火に入る夏の虫だ！」冷笑ひながら一刀に手を掛けるやキラリ引抜いた。「なにを……。」と四方八面より斬込むで來るを右に拂ひ左に撲り、奮闘激戦しながら斬つて捨るもあり、投げ飛されて搦め捕らるゝもあり、數刻の戦ひに七人を斬り捨て二十三人を縛し悠々として引揚げたは目覺しき働きであつた。

幕府は此の勞に報ゆるに陸して上班騎士の重役を授けんとした。勇は固く辭し、賊を捕ふるは素より我が職である、之れしきの事に何ぞ過賞を要せん、我れは新撰組の隊長にて可なりと、又願ざる清藤潔白は吏員をして感嘆せしめ、一面には此事あつてより浪士間にいよく不安の念を抱かしめた。

三 四條磧の腥風

其の七月であつた。長州藩の老臣福原越後等兵を率ゐて京師を侵した、是れより巽き中山忠光の兵を大和五條に擧ぐるあり、平野國臣の但馬生野に干戈を弄するあり、又下の關にて長州藩の外船を砲撃するあり、天下は亂麻のごとく上下安を偷むの隙なく、別て京大坂の附近は今にも戦争が起らんとして、暗雲漠々騷擾を極めてゐる時、長藩の攻め寄せたりと鼎の沸くが如く右往左往に逃げ惑ひ、其の混雜の状は目も當られぬ慘劇を演じた。けれども會津薩摩兩藩の迎戦に長軍は打て卻けられ、京都は幸ひに燒土の難だけを免れたが、長軍の別將真木和泉は天王山に陣營を敷き、敗軍を收めて盛返さんと氣色中々熾んで、烽火の光は天を焦して霸氣縱横に溢れてゐる。

これを望見した幕府方は、今にして揉み潰さず逡巡日を曠ふする

時は、時節柄浮浪の徒が集つて後詰を爲さんも知れず、素より烏合の勢とは云へど、千丈の堤も蟻の一穴より崩るゝ事あり、速かに追討せざれば如何なる不覺を醸すも計り難しと、守護職松平容保に追討の命令は下つた、是に於いて兵を催し近藤勇は部下の壯丁を引率して其の先登となり、天王山へと押し寄せた。然るに敵將真木和泉防戦最も力め、それに屬する士卒は皆長州武士、慷慨にして克く闘ひ近藤勇の部下も一時は撃退されんとした。勇は憤然陣頭に跳り出で

「取るに足らぬ儘の敵に臆したるか、進め！進め！一揉にもみ潰して了へ。敵に後を見られては新撰組の名折れとなるぞ、我れと思はんものは續け！」と聲を勵し自ら真先に進めば、之れに氣を得し面々曳々登りて山に登る。その勢ひ破竹の如くなるに、如何に負じ魂の勇敢なる長州武士も、後援の軍あるにもあらず、糧食も乏

しき一介の孤軍、幕府の兵を引受けて何時まで支へ得べき、和泉も天を仰いて歎息し、嗚呼天なる哉命なるかなと自ら陣營に火を放ち、一軍潰えて右往左往に散亂し、其の陣所は猛火熾々と天に漲り、攻め寄するもの潰走するもの、喚き叫ぶるは磁々として震動した。長州勢は一旦打ち拂つたが、再び押来るべしの風説あつて、人心ますます穩かてなく、浮浪の徒の跋扈は又一層に度を加へ、不穩の情報頻々と來たる中に、新撰組の隊長近藤勇を殺さずんば志士の運動に妨害あり、當面の敵は勇なり、彼れを打果せば新撰組は恐るゝに足らず、會津の守護職何かせんと浪士の憤怒は、勇の一身に彙集して常に陰を慕ふて尾行するもの幾人！。而も此處にも二三人！彼し處にも四五人！、皆刀の鯉口寛げて團栗眼をすゑ、隙あればと窺ひるのである、あゝ實に勇の一身は危険である彼れの危険は浪士等を抑壓する幕府の威嚴に關するのだ、只だ新撰組の隊長近藤勇を

の者のみの危険で無いのである。で、守護職よりも注意を與へ、彼の他出には必ず護衛すべきことを申し渡さるゝ程であつた。

一日守護職から即刻出頭せよとの召状が来た、勇は二人の部下を従へて役宅へ罷出ると、

「其方儀此度眞木和泉追討の手柄抜群の趣を聞召され、兩番次班仰せ附られたり、有難くも請致すやうに……。」との申渡してあつた勇は直に容儀を改め

「有がたい上様の思召には候へ共、近藤勇は新撰組の隊長にて過分でござります、斯かる重き御役目は當を得ぬ儀と存んじ申します。……國家多事の今日、徒に御役目のみ重くとも御奉公のほど覺束なう存じまするつて。夫よりも只今の役にて同士と協力御奉公申し上るが却つて心易う存じまする。」と固く辭しても請をしない。守護職の役宅を暇して立ち出でたは最

ラ夕暮れ、途にて夕飯を濟し三條大橋の袂へ來たりし頃、日もとつぷり暮れて兩岸の高樓には燈火輝き、清き流れの加茂川に火影を投げ入れてゐる。時はこれ八月の初め、四條磧の納涼にざんざめく頃なれど今年は世の騒々しさに形ばかり納涼臺の設けはあつても、浮々と遊ぶもの無く、赤前垂も毎夜の斬つはツツに恐れて出るは稀れである。

「あゝ涼しいな、磧の雜鬧せぬは幸ひだ、寛々涼風を入れて歸らう。」と勇は無頓着に四條磧の方へ歩き出した。

「先生、浪人どもに御注意遊さぬと、何様狂言を習くか知れませんぞ。」

「はゝア、今夜あたりは尾行て來るかも知れんらう。……ナニ來た處で、近藤勇を殺す程の奴も來まいよ。」と平氣である。部下も其の大膽なるは知つて居る、其の武勇あるも知つて居る、殊に尾行す

る者のあらんと覺悟しての納涼、喧嘩位はあつても左程の騒ぎはあ
るまいと、高を括るは勇將の下に弱卒なしの盛。
勇は二人の部下を相手に懼りなき高調子、最う一人や二人は出て
來さうな者ぢやと磔を逍遙ゐた。淋しい、別て今宵は寂しい。暫く
加茂川の清流に納涼て、いざ罷り歸らんと三四歩出る後より
「近藤勇待て！」と一聲叫んでバラ／＼と五六人行途を塞いだ。勇
は悠然として更に騒がない、
「待てとは何の用ぢや。」

「汝の首を所望ぢや！覺悟ッ。」と言ながら白刃は眼前に閃めく、
「うむ、此の首か。……貴様たちには未だ遣れぬ。」と一步退るとき、
浪士は鋒芒揃へて斬り込んだ。勇が氣合の一喝かゝるや、前に進ん
だ一人は血煙立つて殞れる、浪士の面々は皆腕に覺えのある壯者、
勇が部下の二人とて素よりの豪傑である、敵も味方も入り亂れて激

しく斬結ぶ刃の光は、火影に閃めきて凄く、刃を合す音の水に響い
て身に粟を生ずるは小半時、浪士四人は磔の露に屍を曝し、二人は
闇に紛れて逃げ去つた、
「ふゝむ、弱い奴どもが……。」と勇は死骸を一々改ためて、ぶらり
く！。

四 寺田屋の騒動

大雨將に來らんとして風樓に満つて、京師の天地は暗雲騰々慘澹
たる光景を表し、今にもあれ強雨迅雷轟き來らんする時に中り、土
佐侯山内容堂より將軍慶喜に大政奉還の建議が出た、天下の大勢如
何とも爲し能はざるを察して、慶喜の意は決し其の趣意書を御三家
譜代の大名以下に示された、孰れも夢に夢見る心地で、東照神君が
風に櫛づり雨に沐して子々孫々に傳へられた、十五代二百餘年の大

徳川家

權を一朝他人の遊説に惑され、之れを土塊の如く抛つは淺慮き至りである。あゝ將軍家は時勢の暗潮に心を痛め、鬱悒の餘り物に狂せらるゝにあらざるかと、會津桑名を始め國家に參與する藩士、また新撰組の人々も眉を蹙め物議沸騰して鼎の沸くが如くであつたけれども將軍家の意は既に決した。最早挽回の策盡たる上は徒に躊躇する場合でない、紛々擾々たる物議を排して慶應三年十月廿四日を以て征夷大將軍の世職を辭し、退いて大坂城に入られた。斯くなつては最う是非がない近藤勇も新撰組を率ゐて伏見に駐劄し、ますく警戒を嚴重にし浪士の舉動に注目してゐる。

當時河原町なる土藩邸前に寺田屋といふがあつた。此家には彼の名高き土藩の志士坂本龍馬が才谷梅太郎と變名して止宿してゐた。頃はこの慶應三年十二月十四日である、石川誠之助と相會し密談に時を移し、日の暮るゝも尙ほ議の果ねば互に膝擦寄せて、或ひは獄

き或ひは笑ひ滿腔の熱血を吐露して餘念なかつた。師走の半とて夜の更るがまゝに寒さは肌に沁みる、時雨んとする空の色は最と物凄くなつて、今まで水に響きて喧すしかつた向ふ岸、花柳の巷に糸竹の調べも絶え、加茂川の水の音のみが寂しく耳に入るとき、コト／＼と案内する者がある。次の間に寝もせず火鉢抱へてまじ／＼して居て、龍馬の僕藤吉が出て見ると三人の浪士だ。而も懇懇に一禮をして聲を潜め、

「只今才谷先生は御在宿召さるかな。」と問ふた。深夜に浪士の尋ね來ることは珍しくない、僕は何氣なく

「主人は在宅でござります。」

「一大事あつて夜中ながら推参いたした、是非至急に御面調相願ひ度、何うか宜しく取次下されよ。」と口上は誠に丁寧であるが、何處となき鋭き目先に一癖あると見て取つた僕の藤吉、油断をしな

「御姓名は……。」と言たるに浪士の一人は名札を取出し、
「これを先生に見せ下されば、我々の姓名は御承知でござる。」と
言れたので、藤吉は其の名札を手にして二階へ上がる。

三人の浪士はそれと身構へをして抜き足さし足、目釘をしめし、
太刀抜きをばめて息もせず、忍びやかに梯子段を上ると見えたが、
前に進んだ一人の浪士は飛び込みさま一聲をツと叶ぶや、閃く電光
いま龍馬の傍近く進まんとする藤吉の肩先より斬つて殞した。

龍馬は振り返りさま

「浪籍者！」と叫んで身を構へる間も無く、續いて跳り込んだ二人
の浪士、鋭く打つ太刀に龍馬は肩より首にかけて斬られた、斬られ
ながら床の間でありし一刀を把り、再び打ちこむ二の太刀は鞘の儘
に發止と受けたが、初太刀の重傷に働くこと叫はず、三度目の太刀

をば受け損じて頭腦を横に拂はれ、血汐に塗れて挫と其の場に倒れ
た。

また賊之助は其の際に、傍なる短刀取つて振り翳し、浪士が斬り
込む初太刀は確に受け止めたが、鋒芒餘つて腦天へ斬りこまれ、眼
晦みしを残念と武者振つく處を再び後袈裟に浴せられ、同じ枕には
つたり斃れた。一人の浪士は莞爾として

「最うこれで可し！」と云ふを尙ほ一人は執念くも又龍馬の腰に一
刀深く斬り付け、悠々と梯子段を下りて戸外に出るや、聲高らかに
謠曲をうたひ何處ともなく、暗に三人の姿を隠して了ふた。

豪膽なる阪本龍馬は重傷を負ひし、其の身の痛苦も忘れて頭を掻
げ、浪士が謠曲を唄ひて平然と立去るに耳を澄し、

「心憎き振舞！。うむ、今宵の刺客は恐く尋常のものであるまゝ。
斯ほどの騒ぎを演りながら、あの謠曲の調子、五音の變らぬは」

と踏々跟々つゝ立ち上つて、行燈を掲げ次の間まで出たが、また取つて返し血に塗るゝ我が刀を見ると、鞘越しに受けた太刀痕は凄く残る。

「天晴な手腕だ……あゝ最う堪らぬ、石川く」と呼んだ筈へがな
い。「彼れも絶息したか……。」と呟やいて挫と倒れたまゝ、龍馬の
英魂は彼れの軀を離れた。

當夜の刺客は假令その不意を打ちたるにせよ、鬼神と呼ばれて浪士間に尊崇さるゝ阪本龍馬を、容易く一舉に斃し負せたは、其の手續と云ひ、膽力と云ひ天晴天下一の剛者と評されたも道理である、此の刺客こそ實に新撰組の隊長近藤勇、土方歳三と今一人であつたのである。と、*しんせんぐみ* をいひし。

抑も勇が阪本龍馬を狙つたには理由があることとて、龍馬は實に當時の志士中に於ける棟梁であつた。彼の將軍家の政權奉還の發表さ

れた時のごとき、窃に土方歳三と謀つて此の時から龍馬を狙つた。「彼れ龍馬は薩長兩藩の間に奔走して、其の連衡を圖る首腦者ぢやぞ、幕府を倒さんとする浪士の巨魁ぢや。……二條城中の大廣間にて勝手な熱を發議せしめた主動者ぢや。……慶喜公の御首を賜らんなどと人も無げな壯語を放ち、關白殿下をも驚かした策士ぢや。彼れ一人を除きなば幕府を輕侮する浪士の膽を寒からしめるのぢや。」と歳三と協議して日夜龍馬の宿所を狙つたが、機會なく今日まで目的を達する事が出来なかつた。然るに此の夜は彼れの同志は多く四方に出張して、其の空虚なるを窺ひ咄嗟の間に闖入し、意の如く斯く容易くも本望を遂げ得たのである。

五 伏見街路の狙撃

伏見は京坂に入る咽喉の地である、三百年來泰平の礎固めた徳川

の天下も、哀れ世の風潮に逆流すること難く、勤王攘夷の徒は日に
旺盛となつて、時の將軍慶喜も其の職を奉還して大坂城に籠るや、
彼の浪士は時を得て羽翼を張り、跋扈跳梁制すべからざる形勢とな
り、徳川幕府に對する舉動のいよ／＼穩かならず、今まで受けた壓
伏抑制に報いんとするもの、如く、甚だ危険の虞れがあるので、新
撰組を率ゐる近藤勇等は伏見に駐劄してますます警戒を嚴重にし、
浪士に對する處置のごとき一層度を加へた。

勇の手並は既に浪士間に喧々として傳へられてゐる、殊に已れを
知るものゝ爲に端さんと決心で、大坂の警戒を其の咽喉の地に於
いて實行するから、勤王攘夷を唱へて幕府と争ふ黨與には妨げとな
る、只だに妨げとなるのみでない、入洛の志士に對して咽喉の地を
閉塞され、其の不便最も甚だしいのである。是に於いて勇を狙撃し
て殞さんと圖るもの日を逐ふて殖えた、彼れの止まる周圍には常に

刺客が附纏ふ有様であつた。けれども彼れは大膽である豪傑である
目前刺客のあるを知つて酒を飲んだ、酔て倒れると軒聲雷の如く響
いた。此くの如く人を呑んで恐れざる鋭き威力に抵抗しかね、彼れ
を刺すべき機會はあつても何時も其の機會を失し、手を空く過ぐる
ことが多かつたのである。

薩藩の志士は勇を憎むこといよ／＼強く、或處に會合して時事を
談論した折柄、

「將年家は我々の威力と、輿論の偉大なる壓力に依つて、既に職を
辭したが、邪魔になるは新撰組の近藤勇ぢや、彼奴を仆して仕舞
んけりやア、我々の活動に大障礙を及すぢや。」

「彼奴、中々手硬い奴ぢやぞ！尋常の手段では到底壓伏さす事は
出来ん。」

「うむ、一刀兩断の處置を用ひなけりやア、目的は達せられぬぞ。」

「然り、一刀兩斷が宜し！」
「手温ひ手段では容易に届する奴ぢやないわ。」

「ぢやア、刺客！」

「あつ。聲が高い、何處に何様奴が聴て居らうも知れぬぞ。……計略は密なるを以て宜しとすぢや。」

「斯く相談が決すれば、同志と圖つて人撰が肝要であるがだ、尋常一様の刺客では登東なからう。」

「左様、寧ろ鐵砲にて只だ一發の下に息の根を止めるが上策だ。彼奴の頭に白刃を加へんとするは壯快の舉ではあるが、此の頃の形勢では彼奴も油断なく用心して居るぢやつて……。」

「些と卑怯ではあるが不意に射撃して、其の生命を奪ふが捷徑であらうよ。」と浪士間の協議は決した。刺客となる可き人撰は行はれた。當撰するもの某々等六人！」

身邊に附纏ふ刺客の此の頃別けて激しくなつたは勇も疾く知る、部下の處士もまた鶴の目鷹の目警戒を怠らない。然れば所謂勤王の士なるものに注意を拂ふこととますく鋭く、苟且にも舉動不審と見ると、少時の猶豫もなく遠慮もなく、幹々と捕拿に着手して更に假籍する處がない。従つて市中の取締が嚴しく少しく足を止めるも、直ぐ誰何して返答曖昧と見るや、引括るに躊躇しない。相互の反目軋轢は正に燒點に達した。

一日勇は部下數人を従つて市中を巡視してゐた、何時になく浪士の往來最も多い。

「先生、今日は少々市中の様子が變てござる、彼等に何事かの計畫のあるのではござるまいか。」

「左様ぢや、何となく彼等は殺氣を帯びて居るやうぢや、斯様とき殊更に警戒するが我々の役目である、方々も注意召されい！」

「委細畏りました。」と部下も油断なく氣を配つて數十歩すると、後より三人の浪士が尾行するを認めた。

「先生、甚だ怪しき浪士が尾行して参るやうでござる、お氣をお掛けなされませ。」と部下の者が注意をして、其の舉動を偷むが如く振返つては監視して居た。勇も如何なる奴が尾行るか知らんと願た浪士には違ひあるまいが、夫れが一目しても其の風俗に知れる薩摩隼人、ハテ此の浪士一癖あらん、舉動に不審な處があると首肯したので、態と立ち止つて

「各方、彼等先へ行き過ぎて御覽なされい。何事をか仕出すも知れ申さんぢや。」

「承知仕りました。」

「油断なされるな。……併し咎めずに其の舉動を御覽なされ。」と注意した。

三人連の浪士は勇等の佇立みしを見て、歩調を弛めたが立止つては疑はれる恐れあらんと察したか、又のろ／＼と歩み出して勇の傍に寄つて、機會を求めんとするものゝ如くに思はれた。其の體を早くも覺つたので、勇は素より油断をしない、部下のものも皆浪士の舉動に目を注いでゐた。で、近寄つたけれど何事をも仕出來す機會を得ない、然り氣なく尻目に掛けて通り過ぎて了ふ。

「先生、何うも怪しいぢやありませんか、引つ捕へませう?。」

「さや、捕へるには及ばん、尾行して遣らう。」と勇は臆する體もなく悠々と其の跡を慕ふて進んだ。

進むこと一丁餘、稍や人家を離れて郊外近くなつた。一方は竹藪生い茂つて雑木交り、一方は廣々とした田畑の處へ來た。三人の浪士は頻に後を顧つゝ歩んだ、突然竹藪中がさりと云ふ音がしたを勇は早くも耳を敏て立止まる刹那、不意にズドンと一聲鐵砲の音が

して其の肩を射撃された。
「あつ、遣られた！」と勇の叫びに部下は驚き慌て、銃の中へ飛び込み曲者を引捕へんしたが、最う刺客は姿を隠して行方を失つた、勇は傷口を抑へつゝ、
「創傷は浅い！、大丈夫だ！」と神色自若として其の場を引き揚げた。

六 甲府に再舉を謀る

幕府の形勢はますます悲境に陥つた、忽ちにして主客所を轉換し京師は勤王の徒に占領され、兵を四方に徴すこと急し、佐幕の諸侯も旗幟分明ならず、何時戦を逆にして反抗を試んとするも圖られぬの模様がある、頼み難きは人心とは云ひながら、幕府の末路また哀れ風前の燈火となつた。

譜代恩顧の大小名すら言葉を勤王に假りて弓彎んとする時世、況て常に幕府に快からぬ諸侯、大義名分を楯に京師に馳せ参するもの多く、幕府方は之れを途中に喰止めて勢力挽回の策を講ぜんと、諸藩の入京を其の咽喉の地たる伏見鳥羽街道に防遏した。この先陣に立つて最も努力すべきは新撰組である、然るに隊長近藤勇は舊藩薩の刺客の爲めに闇殺された銃創重く、陣頭に立て部下を指揮することは出来ぬ、斯かる危急存亡の秋に際して手を束ね居るは彼れの苦痛である、耐がたい遺憾を忍びて是非なく睡を貪るのである、新撰組は土方歳三代つて指揮して居た。

形勢の斯くなつては双方の意地からでも衝突は免れざることである、俄然伏見鳥羽に大衝突は起つた、新撰組は最も力めて、土方歳三衆を督して奮闘突撃克く戦つた、けれども人心漸く乖離して味方と雖も頼にならぬ幕軍は、企望の輝きをもて昇天の威勢を張る薩長

士の聯合軍とは、其の意氣に於て既に雲壤の差がある、假令一軍二陣の奮闘激戦すればとて、總軍の意氣はす壊敗しては、また救ふべき策の無いもので、幕軍は大に破れて大坂城中にありし慶喜のごとき、船に乗じて倉皇江戸に引揚げ、新撰組の士これに従ひ、近藤勇も創傷を抑へて東歸した。これ實に明治元年正月にして、此の戦ひは幕府の致命傷である、瓦解の爆發薬に口火を挿入されたのである。

是に於て天下の政權は三藩に歸し、徳川慶喜追討の詔勅は發せられた。斯くと知つた勇等は慷慨悲憤、

「何うぢや土方残念ぢやのう、是れと云ふも畢竟、薩長士の三藩が専横からぢや、彼れさへ打ち破つて了へば、天下は再び徳川のものぢや、御老中だの若年寄だのと肩で風を切つてゐても此様時になつては何の役にも立たんのう。」

「左様ぢや、此の儘手を束ねてゐたら彼等は勢ひに乗つて攻め下るのぢや、御當家にては防戦の手配は肝要ぢや、彼等の來たらざる中に逆襲して銳氣を挫き、味方の氣勢を張れば首鼠兩端を持するの徒も、自から意を決して味方となるは必定であるぞ、何うぢや近藤の意見は……。」

「うむ、逆襲するも、先箱根の嶮に依つて防戦するも、夫れ等は臨機應變の所置にするが好い……。斯くまで打れたり蹴られたり爲ながら、黙して討手の來るを待つとは其の愚も甚だしい。只だそれのみでない、此の分では上様の御身體が危険であるぞ、有司を鞭ち兵を興さするが、目下の急務であるんぢや。」

「然り！。然り！。いざ老中の腰拔どもから……。」
「うむ、遣つつけやう！」と勇は奮然として立つた。

老中も説いた、若年寄も説いた、其他の有司も口を酸ばくして説

いたが、皆因循である估息である、一刀兩断の所置をする事の出來
ない案山子ある、膽力もなければ智慮も無く、只だ戦々競々として
嘸く日を送るのみだ。この体に勇は歎息して孀子語るに足らずと意
を決し、

「あ、駄目だ！。臆病者の寄合で到底も話にならんぢや。何かと
云ふと上様は御體偵遊されて居るに、我々が嘸いではならんなど
勝手な熱を吐き、お家の存亡を傍觀して己れ等の偷安を圖る不忠
不義のものが多いちや、實に憤慨に耐んなア。」

「え、腰抜どもには構はず。豫ての相談の如くな……。」と歳三は
意氣昂り、腕を振って膝を進めた。

「素よりぢや。上様へ報ゆる我々の寸志ぢや。」と勇は莞爾笑つた。
其の翌日であつた。歳三と共に部する處の精銳の兵百餘人を率ゐ
て甲府へ乗込んだ。甲府は幕府直轄の地で、太田筑前守資順が總支

配をして、代官には福田所左衛門、内海多次郎あつて直接の縁故が
ある。

當時近藤勇は大久保大和と變名して頻りに兵を集めた。幕府に心
を寄する者も多くあれば日ならずして馳せ加はる者數百人、勇の大
和は之れを統轄し、歳三と共に部署を定め甲州を根據地として、大
に爲すあらんと日夜劃策に心を碎き、官軍押し來らば一泡ふかせて、
其の勢ひに乘じ雄飛せんとして居る。然れば威名漸く四方に輝き侮
るべからざるものがある。官軍もこの報を聞くや、今にして刈らず
んば斧を用ふる悔ある、三百年來恩顧を受けた者情のみに馳せ、大
義の何者たるを辨へずして其の軍に投ずるものもあらん、尙ほ東北
には諸侯の抗戦せんとする模様もある、勇々忽せにすべからず、と
あつて、追討軍は犇々と押し寄せた。勇等は之れを勝沼に迎へ戦ふ
たが、如何せん後詰とてもなき鳥合の孤軍、數度の激戦に味方は疲

れ、敵はますます新手の加はつて砲聲は山岳に響き硝煙は日光を遮り物凄く、遂に戦ひ利あらずして到底支へ難きを察し、兵を流山に返した。

勇は快々として樂まず、部下の逸雄は切齒扼腕―

「先生、直に士兵の嘯聚を致さうではござらぬか」と意氣尚ほ旺んである。

「先づ待れよ、疾くと天下の大勢を見定めざれば、再び敗劔せん」。部下を慰撫しつゝ、逋徒を鎮撫すると聲言しつゝ、天下の動靜を觀察するに腐心して居た。

七 單身敵營に到る

江戸城は既に官軍の手に收められた。征東總督は既に出發になつた。北陸官軍の參謀香川敬三は千住驛まで來た。天下は最う九分通

り定まつて了つた。この時に中つて近藤勇等いかに勇悍なりとて、如何に大膽なりとて、再び徳川の天下に覆すは容易の業でない。然れども彼れは尙ほ流山に據つて依然と構へて居て。而して中々に屈伏しさうの模様も見えぬ。

或日香川參謀の部下は其の陣所に罷り出て建策した。

「情報に據りますれば、近藤勇士方歳三の黨、今も尙ほ流山に屯して、官軍に抗せんとする由にござります。素より敗殘の落ち武者、當時の勇氣も覺束なき儀でござれば一舉に討ち拂ひ申すべし、兵士の二三百もあれば雜作なく一掃し得られやうと存じます。……。」と云つた、默然と聞き居たる香川參謀は頭を打ち振つて、

「いや、其の思案甚だ妙であるまい。彼れ近藤勇は剛勇の者である、其許が二三百ばかりの兵にて仕懸るときは、如何なる不覺を取るも知れず窮鼠却つて猫を喰ひの聲もあることぢや」

「然らば参謀は如何にして彼れを平定なされる思召しなるや。」と
少しく不平の有様である、香川参謀は泰然として沈黙暫くは胸中斷
案に困しんだが。

「徒に兵を向けて敵を怒らし味方を害ふは得策でないぢや、彼れは
勇猛ではあれど智慮に缺ける處があり、謀略を以て此方へ引き寄
せ、手を濡さずして擒にするに如すだ、若し謀計成らざるときは
是非に及ばず、兵力を用ひて滅さんのみ、勇一人擒にすれば他は
自から潰走するぢや。」と人を撰ひ流山へ使者を立てた。

流山に據て天下の形勢を窺ふ近藤勇等は、最早挽回の策なきを歎
息し、軍を打つて出て潔よく討死するこそ武士の本分であらう、何
時までぐづぐづすればとて回春の期なきを如何せんと、密に心を痛
むる折柄、香川参謀からの使者は来た、隊長近藤氏に面會をと申し
込んだ。

「先生、官軍の香川参謀から使者が来ました、何れ碌な事ではあり
ますまい、軍門の血祭に斬つて捨てませうや。」

「これく左様の亂暴としてはいかん假令敵の使者とて狼に斬るこ
とは相成らん、口上を聞きたる上無禮の舉動あらば容赦なく打ち
果すまでぢや、先づ夫れまでは丁重に扱へ……。」と勇は面會し
て、口上は至極感謝である。

「貴殿の馳名は天下と共に、我が参謀も常に敬服されて居ります、
貴殿には舊將軍家の御謹慎を思召されて、激徒を鎮め恭順の意を
表せらるゝ由、我が参謀も流石は近藤氏だとますく欣慕されて
居ります、若し其の風説の如くで各方が無事に解決を終らんと
思召すならば、参謀の陣所へお越し成されて御協議下され度、参
謀は十分の御便利を遣り申さうと、斯く拙者を使者にお使はしな
された儀でござる。」と述べて打解けた物語りもして歸つた。

勇は此の勸誘に心を動した、斯くてあらんか、只だ日々困苦の迫るのみ、到底回復すべからざる目的と知りつゝ同志を困しむるも氣の毒と、單騎參謀の陣に到り事を決せんとする面色が現はれた。土方歳三その様子を察し進み出で、

「近藤氏、貴殿は參謀の勸誘を何と思召すぞ。」と心元なく尋ねた。「いや、別に深くも考へんぢや。……今日の我々の體裁では中々兵を集めるに困難である、殊に形勢の日に日に非なる現狀で、暇ふは策の得たるものであるまい、參謀の勸誘あるこそ幸ひ拙者は罷り越して萬事を解決せんと思ふが。」

「それは意外のお言葉を聞くものかな、官軍の使者を立てたは貴殿の武勇を憚り釣り寄せるの計略に極つた！由來官軍は偽りが多い、放心彼れの手段に乗せられては臍を噛むの悔あらん、此の行は平に思ひ止られよ。」と歳三は口を極めて諫めた。けれども勇

は其の言葉を用以なかつた。

單身流山を立つて官軍の陣營に赴いた。營門を入つて數歩、左右の幕張は急に波うち、數十人の兵士はむらくと跳り出で、勇を生擒んとした。

「卑怯者奴！」と一喝して投げ飛ばし十數人を怒ら仆したが、敵は素より待ち敷けた畏、勇一人を十重二十重に取圍みて、折り重なつて掛つて来るに、如何に英雄でも豪傑でも支へ得べき、終には計略の爲に擒となつた、勇は切齒その卑劣を怒れども、女々しくは罵らず、其の材武を惜んで降りを勸むる者があるを、莞爾して、事已に此に到る多言何をか爲さんと、舉止平常のどとく、其の刑に臨んでも神色變ることなく、從容として刀を受けた。あゝ彼れは終始一貫した英傑であつた。あゝ其の英名は長久に朽ることが無い。

日本劍客實傳終

明治四十二年八月九日印刷
明治四十二年九月十一日發行

(日本劍客實傳與付)

正價 金四十五錢

著 者 東京市下谷區谷中清水町一番地 樋口新六

發行者 東京市京橋區新肴町十四番地 福田滋次郎

發行者 東京市日本橋區吳服町十八番地 北隆館書店 福田金次郎

印刷者 東京市神田區松下町十番地 橫田五十吉

印刷所 東京市神田區松下町十番地 橫田活版所

發行所 東京市京橋區新肴町十四番地 晴光館書店

振替貯金口座一七五二五番

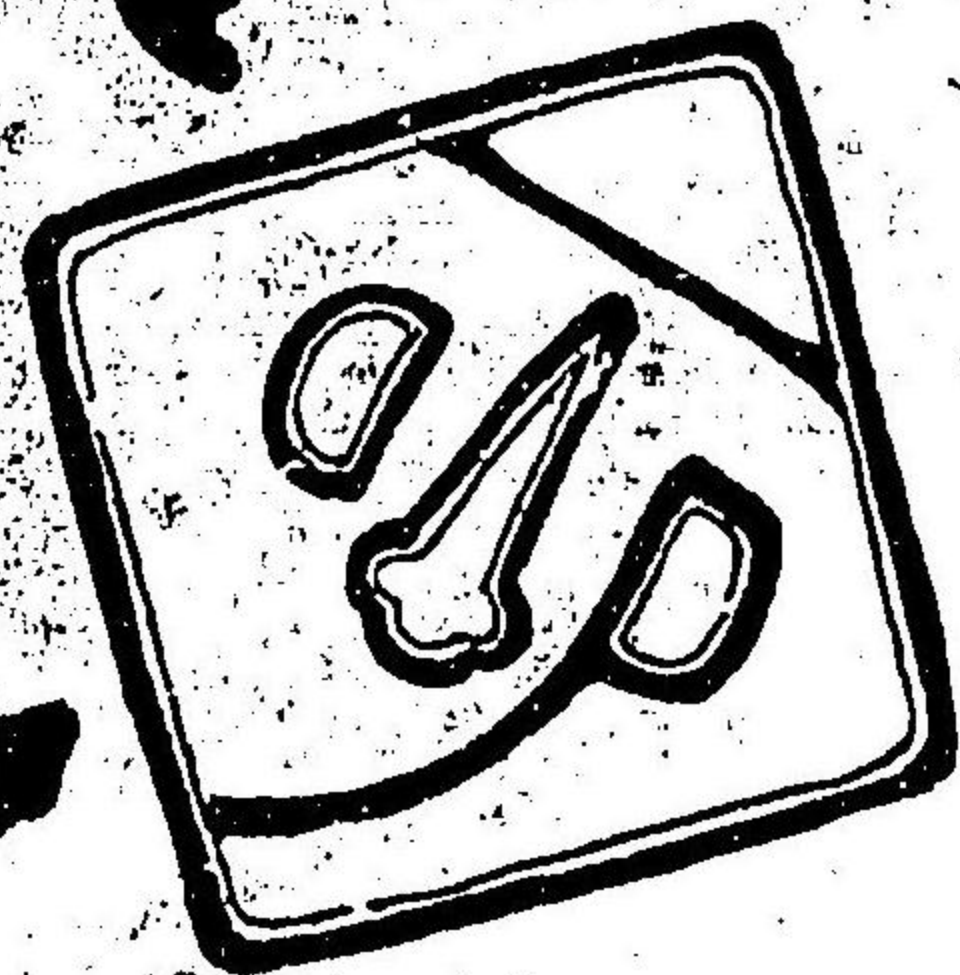
不許複製

近刊及好評書目

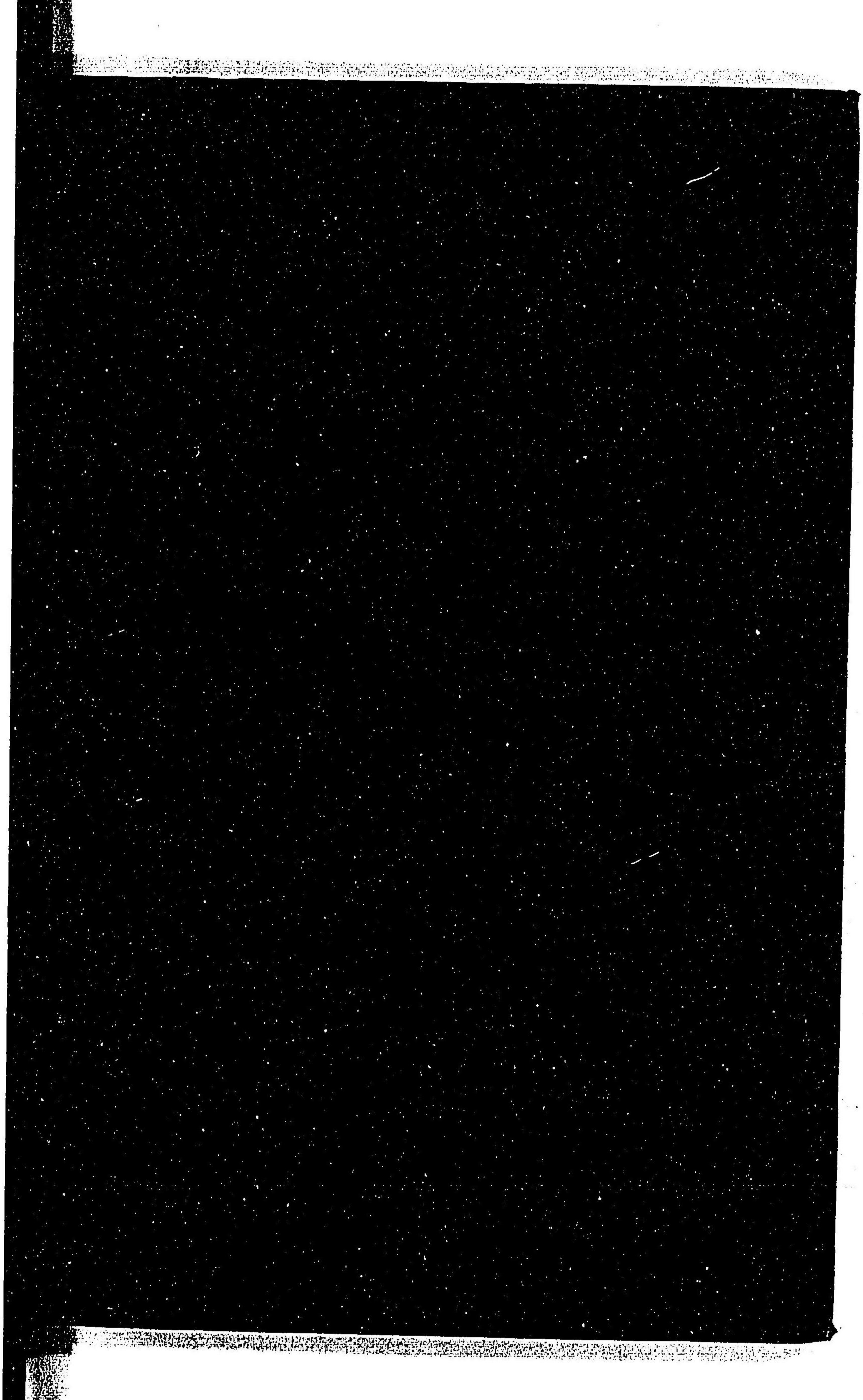
三版 日本俠客實傳	正價金六拾錢 郵稅八錢
三版 日本歷史之裏面	正價金五拾錢 郵稅八錢
三版 明治歷史之裏面	正價金五拾錢 郵稅六錢
六版 世界歷史之裏面	正價金三拾五錢 郵稅六錢
三版 滑稽日本史	正價金三拾八錢 郵稅六錢
五版 滑稽德川明治史	正價金三拾八錢 郵稅六錢
三版 情の英雄史	正價金三拾五錢 郵稅六錢
二版 古人の懺悔	正價金四拾五錢 郵稅六錢
近刊 日本奇人傳	正價金五拾錢 郵稅八錢
近刊 日本怪傑傳	正價金五拾錢 郵稅八錢

晴光館發行

晴之韻



328
19



094844-000-3

328-19

日本劍客実伝

樋口 二葉 / 著

M42

DBQ-2427



